

埋蔵文化財問題の現状

この間催された、「被災地の遺跡を考える見学会」第3回、第4回の模様を報告します。

第3回（1月29日）は、神戸市兵庫区の「兵庫津遺跡」を対象とし、18名が参加。国道2号線共同溝の工事ともなう調査発掘でした。発掘部分は、江戸時代兵庫津の北浜地区の町場にあたり、石垣や陶磁器等が出土。遺物の年代・古絵図等から、この地域は、兵庫津惣門外東部、18世紀中頃～の新開地であることが推定されるとのこと。また、江戸時代の遺物包含層の下からは、中世の遺物は発見されず、よって、中世の兵庫津は、今回の発掘地域にはかかっていないということが確認でき、中世兵庫津域確定という点からも、今回の調査は意義があるということです。現場は、国道2号線のだ真ん中ということでもあり、車の轟音もものすごく、調査員のかたの説明を聞き取るのも困難な程でした。調査主任は、地元の方で、現場近くの市場の方々とも顔見知りのようで、それもあってか、発掘現場への見学者が絶えないとのこと。また、主任の方の、当遺跡に対する思い入れもひとしおのようで、当日の解説レジュメも、非常に詳細につけておられ、車の轟音に声は届かずとも、それに耐えて、遺跡の内容と意義は、聞くものに明確に伝わってきました。「兵庫津」域は、「ハーバーランド」を含む、近年再開発が盛んに進められている地域。地域の開発と発展それ自体は肯定されるべきものでしょう。しかし、それがどのような形で行われるかについては、その開発が誰のためのものかということと直結する事柄だけに、余程慎重であって然るべきだろうと思います。それが、地域社会のつながりを解体し、その肉声をかき消すようなものであっていいのかどうか、国道の下に顔を見せた、石垣と遺物は、そここのところについて、反省を迫っているようにも感じられました。

第4回（3月10日）の対象は、尼崎市潮江の「猪名荘遺跡」で、14名が参加。震災前からの駅前再開発計画ともなう調査でした。発掘部分からは、奈良時代の倉庫跡跡かと推定される、大規模な柱穴が相当数みられ、この地域に「東大寺」の旧字名が残ることとあわせて、東大寺領荘園に関連し、おそらくその中枢部分を構成する施設の跡と想定されます。今回の発掘成果は、長らく、この地域に比定されていた東大寺猪名荘跡地の確定に、大きく一步迫り、それとともに、この荘園についての内容・性格の理解を深めるものと思われました。

次回（第5回）の「被災地の遺跡を考える見学会」は、神戸市東灘区の「住吉宮町遺跡」を対象に、4月2日に行います。JR住吉駅改札口（駅建物2階）前に、午後3時集合ということにしたいと思います。今回は、神戸市との協力による初の見学会です。皆様、積極的かつお気軽にご参加下さい。

（文責・井上勝博）

川西市・西野家文書整理作業終わる

一昨年の1995年11月から継続していた川西市・西野哲夫氏所蔵文書の仮整理（現状記録方式による）は、2月13日の作業をもって一応終了にこぎつけました。作業回数22回、のべ参加人員105名、足かけ3年にわたる長期作業となりました。今回、仮整理作業を行った文書は、総計8,624点に上り、その内容も伊丹の漢学者太田北山の漢学塾関係の史料や川西小学校の初代校長である近藤三郎の教育活動に関する史料など、近代の教育関係史料を多数含む、興味深いものでした。このほか、西野家が所在する小戸村の近世・近代文書も含まれています。

その内容の一部は伊丹市で開かれた市民講座の際の救出史料ミニ展示でも紹介しました。また、こうした整理作業の過程で、修士論文で太田北山のことを研究しようという人も現れ、被災史料救出活動を通じて被災地を対象にした地域史研究が展開していくケースともなりつつあります。文書は、今後もお宅で保存されていきますが、文書の内容についても、今後、関係者の研究発表などの形で紹介されていくことになるでしょう（関心のある方は担当の佐賀までお問い合わせ下さっても結構です）。

（文責・佐賀朝）